

# 主体的に学び、英語で話したい内容や自分の思いを伝えることができる児童の育成

－既習表現とつながりのある単元構想と児童の話す意欲を高める学習活動を通して－

白石市立大平小学校 佐々木 なつ

## 1 授業づくりに関わる課題

今まで行ってきた授業を振り返ると、授業の形態が一斉指導になりがちで、児童の思いを十分にくみ取ることが難しかった。個々の学習の進捗や伝えたい内容が異なることを考慮し、児童自らが話したいと思える学びの道筋を探る必要があると考えた。

本研究の対象は、第6学年1組16名の児童として、6月に行った意識調査（表1）から、外国語の学習を楽しんでいる児童が多いことが分かった。一方、複数名の児童は外国語の学習や英語を進んで話すことに対し肯定的に捉えることができていないことが分かった。その理由として、「自信がない」「みんなの前での発表が難しい」といった内容が挙げられた。また、これまで学んだことを生かそうとする意識や相手に伝わるように話そうとする意識が高まらない児童がおり、既習表現の活用や相手意識を持たせた活動が必要であることが見えた。

表1 意識調査（令和6年6月実施、n=16）

質問 【単位：人】	①	②	③	④
①：当てはまる ②：どちらかという当てはまる ③：どちらかといえば当てはまらない ④：当てはまらない				
外国語の学習は楽しいですか。	6	7	3	0
英語を進んで話そうとしていますか。	2	8	4	2
5年生や前の単元で学習した英語を、次の学習で使おうとしていますか。	3	9	4	0
英語を話すときには、相手に伝わるように工夫していますか。	4	6	6	0

学習指導要領では小・中・高等学校で「言語活動を通して」資質・能力を育成することが掲げられている。小学校において段階的に既習表現を活用し、自分の言葉で思いを伝える児童を育成していくことで、中学校の目標の一つである「即興で話す」ことのできる生徒を育成するための基盤を養うことができ、小・中学校の円滑な接続を行うことにつながると考える。（※言語活動：実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動）

以上の課題から、既習表現を進んで使いたくなるような単元づくりや、英語で話してみたいと思えるような学習活動の設定を通して、主体的に学びながら自分の思いを伝えることができる児童の育成を目指したいと考えた。

## 2 研究の実際

### (1) 目指す児童の姿

授業づくりに関わる課題を踏まえ、本研究での目指す児童の姿を以下のように考えた。

- ① 主体的に学び、進んで英語を話そうとする児童
  - ・学習テーマに対して興味・関心を持ち、自ら課題を見付け、課題解決に取り組んでいこうとする姿
  - ・自分の話したい内容や思いを、自信を持って積極的に伝えようとする姿
- ② 既習表現を活用して自分の言葉で思いを伝えることができる児童
  - ・目的や場面、状況等に合わせて既習表現を活用し、相手意識を持って伝えようとする姿

### (2) 研究の手立て

#### ① 既習表現とつながりのある「単元構想」

各単元を学習する際に必要な既習表現は、単元導入時に児童と確認しながら単元計画に明記していく。児童が定期的に既習表現に触れて慣れ親しむ機会を設けることで、児童が自分の思いを伝える際に活用できるように指導していく。

授業の導入時に行う「Small Talk」は、主に単元計画に示した既習表現を用いた内容で進めていく。一度学習した表現を繰り返し用いることで、英語を話すことへの抵抗感を少なくしながら、本単元で活用する既習表現の更なる定着を図っていく。

#### ② 英語を話す意欲を高める「学習活動の設定」

児童が学習内容を自分にとって関わりのあるものとして捉えることができるように、児童にとって身近な日常生活や学校生活に関連付けた内容の言語活動を単元ゴールとして設定する。

児童それぞれが話したいことや思いを表現できるように、伝えたい内容について調べたり、実際に練習しながら伝えるための工夫を考えたりする時間として、個に応じた学びの時間「My Study Time」を設ける。児童には、ねらいを達成するために自分はそのような課題をどうやって解決すべきか考えて活動させる。教師は児童の学びの助けとなるように、複数の課題解決方法を示し、必要に応じて学習形態や活動場所を選択させる。

「My Study Time」に向け、それぞれの児童に合わせた指導が行えるよう、前時までの振り返りを活用する。児童が記入した振り返りの中から、児童が学習内容に関して感じている課題を全体で拾い上げ、本時の指導に生かす。

## 3 授業実践 I について

(1) 単元について

単元名 Unit 3 「My Weekend」(東京書籍 NEW HORIZON Elementary English Course 6)

単元ゴール 5年生に修学旅行の出来事を伝えよう。

(2) 研究に関わる手立て

① 手立て「単元構想」について

本単元の学習事項である過去形「I went to (場所).」「I ate (食べ物).」で使用する場所や食べ物などは、5年生の段階で学んだ既習表現となる。単元導入時に、本単元で使用する既習表現を児童と確認し、児童の学習計画兼振り返りシートには「Small Talk」の内容として既習表現を記載しておく。

② 手立て「学習活動の設定」について

本単元では「5年生に修学旅行の出来事を紹介しよう」という単元ゴールを設定した。5年生に紹介するという相手意識を持たせながら、全員が共通して体験した修学旅行を取り上げることで、本単元の学習事項である過去形の表現を取り入れさせていく。

「My Study Time」を活用して、「Step1：伝えたい内容を考える Step2：必要な表現を練習して伝え合う Step3：更に分かりやすくなるように工夫する」という段階的な流れで、単元ゴールとなる言語活動まで進めていく。Step1の段階や単元に入る前の事前調査で児童の伝えたい内容を把握し、児童が徐々に相手意識を持って表現できるよう指導していく。振り返りは、具体的な視点を与えることで次時の内容へと生かせるようにしていく。

(3) 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

授業実践Ⅰ終了後に実施した実態調査(表2)と児童の様子を基に、成果と課題を検証した。

表2 実態調査 (令和6年7月実施、n=16)

質問 【単位：人】	①	②	③	④
①：当てはまる ②：どちらかという当てはまる ③：どちらかといえば当てはまらない ④：当てはまらない				
単元のゴールを意識しながら学習できましたか。	3	11	1	1
自分が伝えたいと思ったことを英語で話せましたか。	3	9	3	1
Small Talkの時間の学習は、言語活動の際に、自分が伝えたい内容を話すことに役立ちましたか。	5	8	1	2
My Study Timeの時間の学習は、言語活動の際に、自分が伝えたい内容を話すことに役立ちましたか。	6	7	3	0

① 手立て「単元構想」について

- 言語活動において自分が伝えたい内容を話す際に「Small Talk」が役立ったと肯定的に感じている児童が多かった。児童からは「前習ったことを忘れたときに役立つ」といった意見があり、既習表現を想起させることにつながることができた。
- 児童が自分の思いを伝える際に、「Small Talk」で取り上げたもの以外の既習表現も使っている様

子が見られた。自分の伝えたい内容を話すためには、これまで学んだ表現も必要であるという意識が高まっている。

- 「Small Talk」だけでは既習表現を思い出せないと感じている児童が複数名いた。児童からは「Small Talkだけでは前に学んだ英語を思い出せなかった」「使いたい英語が出てこなかった」などの感想が挙がった。児童の伝えたい内容や既習表現の定着度合いをより丁寧に見取る必要がある。

② 手立て「学習活動の設定」について

- 「ラーメンが美味しいことを5年生に知ってもらいたい」「5年生にも分かりやすいように伝えたい」など、児童が興味・関心のある内容であったことに加え、「だれに」という相手意識を持たせたことで、単元ゴールや話す相手を意識しながら学習活動に取り組んでいる様子が見られた。
- 言語活動において、自分が伝えたい内容を話す際に「My Study Time」が役立ったと肯定的に捉える児童が多かった。特に、「友達と話す」ことによって、英語の言い方を覚えたり、詳しく話せるようになったりしたと感じている児童が多かった。
- 「My Study Time」の時間を充実させようとするあまり、児童が伝えたい内容をアウトプットする時間を十分に確保できなかった。
- 「My Study Time」の中で何をしたらよいか分からなかったという感想が挙がった。児童が自ら課題に取り組めるように、活動内容をより具体的に伝え、見通しを持たせる必要がある。

4 授業実践Ⅱについて

(1) 単元について

単元名 Unit 5 「Where is it from?」(東京書籍 NEW HORIZON Elementary English Course 6)

単元ゴール Jay先生におすすめのラーメンの具材や産地を紹介しよう。

(2) 研究に関わる手立て

① 手立て「単元構想」について

児童が単元に必要な既習表現に気付けるように、単元導入時にデモンストレーションを見せ、どのような英語表現が必要になるか児童に考えさせるよう

〈3回目めあて〉  
**オリジナルサンドイッチのこだわりポイントを伝えよう。**

【Small Talk】  
 ◎What vegetable do you like?  
 ●I like green peppers. It's bitter.

好みの聞き方  
p36

野菜果物  
p15

味など  
p15

図1 児童に提示している単元計画の一部

にする。確認した英語表現は単元計画内にも示す（図1）ことで、児童が常に確認できるようにしておく。「Small Talk」は、各授業内容に関係するテーマを設定し、授業時間全体を通して、既習表現に触れることができるようにする。また、児童の定着度合いや伝えたい内容を考慮しながら、必要に応じて「Small Talk」の内容変更や補助資料の準備を行う。

## ② 手立て「学習活動の設定」について

本単元では「ALTにお勧めのラーメンの具材やその産地を紹介する」という単元ゴールを設定した。ALTの好物を取り上げ、お勧めの具材やその産地を教えてほしいという依頼を直接ALTから児童にしてもらうことで、児童が学習活動に興味・関心を持てるように進めていく。

「My Study Time」では、「友達とやり取りをしながら進める」「先生と相談しながら進める」「ヒントを見ながら進める」の3つの基本の形態から選択し、児童の必要感に合わせて学習形態や活動場所の変更を行う。上記のような基本の形態を決めることで、児童が何をすればよいか迷わないようにするとともに、アウトプットの時間を確保できるようにしていく。また、教師はそれぞれの振り返りに対し、次時からの「My Study Time」の活動で参考になるようなコメントを入力し、児童へフィードバックする。

## (3) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

授業実践Ⅱ終了後に実施した実態調査（表3）と児童の様子を基に、成果と課題を検証した。

表3 実態調査（令和6年11月実施、n=16）

質問 【単位：人】	①	②	③	④
①：当てはまる ②：どちらかという当てはまる ③：どちらかといえば当てはまらない ④：当てはまらない				
単元のゴールを意識しながら学習できましたか。	1	10	3	2
自分が伝えたいと思ったことを英語で話せましたか。	3	10	2	1
Small Talkの時間の学習は、言語活動の際に、自分が伝えたい内容を話すことに役立ちましたか。	6	8	2	0
My Study Timeの時間の学習は、言語活動の際に、自分が伝えたい内容を話すことに役立ちましたか。	4	11	0	1

### ① 手立て「単元構想」について

○ 「Small Talk」が役立つものであると感じている児童は変わらず多く、「友達との英会話」によって既習表現を思い出すことができたとする理由が最も多く選ばれていた。また、「先生たちの英会話」を聞くことで思い出せたとする理由も増えていた。思い出してほしい表現だけを取り上げるのではなく、ストーリー性を持たせたデモンストレーションを見せることで、本単元のどのような場面で使用する表現であるかを明確に示すことができたことが一因であると考えられる。

○ 単元の導入時に必要な既習表現とその表現が載

っている「My Picture Dictionary」のページ数を確認したことで、思い出せない表現があった際に児童自身が「My Picture Dictionary」を開いて調べることが増えた。

○ 「Small Talk」で使用した既習表現を黒板に掲示する形で残したことで、「Small Talk」の時間だけではなく、「My Study Time」の時間などにも掲示物を確認しながら活用する様子が見られた。



図2 単元導入時に確認した既習表現の提示

○ それぞれの振り返りにコメントを記入したことで、次時の「My Study Time」において、それぞれの課題を意識して活動している様子が見られた。

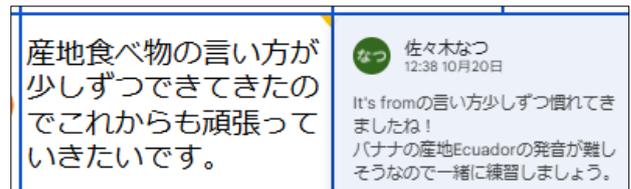


図3 児童の振り返りと教師からのコメント

● 事前調査では身に付いていると思われた表現でも、実際の会話では使われていない様子が見られた。その時の児童の習得の様子に応じて、やり取りよりも練習の時間を増やしたり、友達同士よりも教師と児童での会話を増やしたりと臨機応変に対応する必要がある。

● 英語でのやり取りが一問一答になってしまい、会話が続かない場合が多かった。始めと終わりの挨拶を決めておいたり、返答の種類を増やすために練習をさせたりと、やり取りを充実させるための手立てが必要である。

### ② 手立て「学習活動の設定」について

○ 「My Study Time」が役立つものだと感じている児童は変わらず多く、その中でも「友達とやり取りをしながら進める」方法が役立ったとする児童が前回と同様最も多かった。また、「自分の考えが深まる」「間違っていることなどが分かる」「自分のやりやすい形ができる」など、役立つと考えた理由として新たなものが挙げられた。前向きな回答へ変化した児童が挙げた理由の中には、「ALTとの練習が役立った」「分からないことが聞けるようになった」など、「My Study Time」の有用性を実感している内容があった。

○ 児童は「友達と」「先生と」「ヒントを見ながら」の3つの基本の形には慣れてきており、自分に合った形を選択できるようになってきている。

- 単元ゴールへの意識が前回と比べて、あまり高くないことが分かった。単元ゴールは板書や単元計画に提示しているが、児童と一緒に確認する機会が単元の導入時と最終段階の言語活動時のみになっている。各時間の学びが単元ゴールへどのようにつながっているのか、児童自身に考えさせるなどの工夫が必要であった。
- 「My Study Time」の始めには、説明後すぐに「何をすればいいの」と質問に来る児童がいる。行程を板書したり、必要に応じてワークシートを用意したりして説明しているが、一斉の指示の中に複数の活動が含まれる場合には、スモールステップでできるような活動を準備するなど、別のアプローチを考えていく必要がある。

## 5 まとめ

### (1) 研究の成果

以上の実践結果や児童の実態調査を踏まえ、目指す児童の姿を達成することができたかを検証した。

表4 実態調査（令和6年実施、n=16）

質問 【単位：人】	①	②	③	④	
①：当てはまる ②：どちらかという当てはまる ③：どちらかといえば当てはまらない ④：当てはまらない					
外国語の学習は楽しいですか。	6月	6	7	3	0
	11月	4	8	4	0
英語を進んで話そうとしていますか。	6月	2	8	4	2
	11月	3	8	4	1
5年生や前の単元で学習した英語を、次の学習で使おうとしていますか。	6月	3	9	4	0
	11月	4	9	2	1
英語を話すときには、相手に伝わるように工夫していますか。	6月	4	6	6	0
	11月	4	10	1	1

上記の質問項目においては実践の前後で数値に大きな変化は見られなかったが、それぞれの理由には変化が見られた。

「外国語の学習は楽しいですか」の質問に対して、6月の段階では外国語の学習が楽しい理由として歌やチャンツ、ゲームが楽しいというものが多かった。11月には「英語を知るのが楽しい」「発音を覚えるのが楽しい」「友達と英語でしゃべったりすることが楽しい」「ALTの先生と練習するのも楽しい」など、英語を話すこと自体に楽しみを見いだす児童が増えたことが分かった。

「英語を進んで話そうとしていますか」の質問に対しては、③から②に変化した児童の理由として、「人の前に出るのは苦手だけどクイズを出すことならできる」と挙げられており、全てではなくとも伝えやすい活動があることで肯定的に捉えることができるようになっていたことが分かった。また、進んで話せる活動として児童が挙げたものの種類が6月よりも増えており、様々な場面で進んで話せるよう

になってきたことが分かる。

「英語を話すときには、相手に伝わるように工夫していますか」の質問に対して、肯定的な回答が増えており、相手に伝わるように工夫するという意識が高まってきていることが見てとれる。実践Ⅰでは伝わるようにするための工夫として、ジェスチャーやアイコンタクトへの意識の高まりが見られ、実践Ⅱでは「内容を詳しくする」「レスポンスをしながら（反応を返しながら）」など新たな工夫も挙げられた。内容を詳しく表現するために既習表現を積極的に確認している様子も見られ、児童の中で以前学んだ表現を使用しているという意識があまりなくても、自然に既習表現を使おうとしていることが分かった。

### (2) 今後の課題

「Small Talk」「My Study Time」において、単元を通して、ねらいに沿った設定をすることで、児童が話したい内容や思いを伝えるための一助となっていることが見えてきた。これらの活動を、児童一人一人にとって更に取り組みやすいものにしていくことで既習表現を活用しながら、主体的に学び、進んで英語を話そうとする児童を育てることができると考える。

また、児童はオンライン表計算ソフトでの振り返りの記入や友達との共有、教師からのコメントの確認にも慣れ、活用できるようになってきている。コメント機能はいつでも見られるものとして便利ではあるが、児童にその場で直にフィードバックすることでより強く意識させることができたり、児童との対話を通してより必要な指導ができたりすることがある。コメント機能の活用と児童への直接のフィードバックの両者を効果的に活用することで、児童の思いをくみ取った授業づくりをしていく。

今回の研究において、授業中の児童の様子やこれまでの実態調査における理由の変化から成果は見えてきているが、表4を確認すると大きな数値の変化が見られないことから、児童の意識の変化は乏しいことが分かる。英語を使って自分の思いを伝えることができたという意識を児童自身が持つよう、更なる指導の改善を進めていく。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成29年告示)外国語活動・外国語編」
- 2) 国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料」東洋館出版社
- 3) 文部科学省(2017)「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」

#### 【図表等の許諾について】

図3は授業実践の中で児童が記入した振り返りの一部である。研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。